

# 海外レポート

## 近年の中国・台湾の中国宋史研究の状況

平田 茂樹

筆者は2012年2月27日から6月1日まで台湾の国立政治大学に滞在し、客座教授として学部生と大学院生の後期の授業を担当した。授業は毎週火曜日と水曜日の合計二コマを行い、また余暇を利用して国立成功大学、国立中正大学、国立清華大学、国立暨南国際大学、東海大学といった台湾の大学を訪問し、講演を行った。そのほか、中央研究院、台湾国立師範大学、国家図書館などの研究機関、図書館などに資料調査、もしくは研究会参加の目的で訪れる機会があった。7月23日から27日の間は、大阪市立大学大学院文学研究科と台湾中央研究院近代史研究所との合同シンポジウム「近代東亞城市的社会群体与社会网络」国際学術研討会に参加し、8月18日から23日は、宋代の古都開封で開かれた宋史の国際学会「宋都開封与十至十三世紀中国史」国際学術研討会暨中国宋史研究会第十五届年会（以下、宋史年会と省略）に参加する機会を得た。今回はこれらの活動の中から海外の中国宋史研究の状況について幾つか報告する。

昨年の『都市文化研究』第14号所載の拙稿<sup>1)</sup>でも触れたことだが、近年、中国宋史研究の分野は国際交流が急速に進みつつある。丁度、台湾の政治大学に滞在中、ほぼ時期を同じくして中国の中山大学の曹家齊教授が中正大学に客座教授として招かれていた。曹教授とは長年来の友人であり、成功大学、中正大学、暨南国際大学などで講演活動を共にする機会を得た。中国と台湾との間の学術交流は近年とみに盛んとなり、相互に学者、学生の交流が頻繁に行われている。政治大学で一度講演を行った時に、先方の先生から教示いただいたことだが、台湾の主要大学に於いては外来の研究者に講演を行ってもらい講演曜日を決めているとのことであった。上記の大学訪問ならびに講演もそうした日程に合わせて先方が手配してくれた。

政治大学<sup>2)</sup>では客座教授として一室があてがわれ、そこを利用して授業の準備を行った。台湾の有力大学の図書館は学術図書、専門雑誌が充実し、研究環境が整っている。特に有り難かったのは中国史に関するデータベースが充実しており、滞在中データベースを利用して多くの資料を入手することができたことである。また、

台北には中央研究院、国家図書館といった中国学関係では世界有数の資料、蔵書を誇る研究機関、図書館も存在しているため、学術情報の入手には優れた環境となっている。台湾滞在中、会食した日本の明清史の研究者は、大陸ではなかなか入手しにくい資料が台湾ではたやすく手に入るとその利便性を語ってくれたが、確かに中国史の資料を手に入れることについては、大陸や日本より優れた環境となっているように思われる。

政治大学は台湾でも有数の大学と知られており、学生の質はかなり高い。担当した学期中、二度ほど学部生、大学院生にそれぞれレポートを課したが、優秀なレポートが目立った。特に大学院生のレポートは同年代の日本人大学院生と比べ、豊富な知識と高い問題意識を感じさせてくれた。

台湾に滞在中、中央研究院歴史語言研究所で開かれている南宋の文集の読書会に二度ほど参加する機会を得た。現在、台湾の宋史学界を代表する研究者の一人黄寬重氏が毎月開いている研究会で、現在の共同テーマは南宋末期の「嘉定年間」に置かれ、その時期を中心に文集史料を基にした南宋社会の解析が進められている。具体的には若手の研究者に南宋の文集を選ばせ、その文集を通読した上で、その中から問題を発見させ報告させるというものである。文集にはある特定個人が残した各種の資料が採録されている。劉摯『忠肅集』を例に取れば、「制勅」「表」「劄子」「奏議」「啓」「書」「記」「序」「雜著」「神道碑」「墓誌銘」「祭文」「五言古詩」「七言古詩」「五言律詩」「五言長律」「七言律詩」などである。これまでの研究傾向からすれば、文学研究者は「詩」の部分、個人の伝記を調べる研究者は主として「神道碑」「墓誌銘」「祭文」の部分、政治史研究者は「劄子」「奏議」などの部分を断片的に解析する傾向が強かった。この読書会の特徴としては、通読を心がけると共に、資料を精読することを併せて狙いとしている。従って、毎回報告者はそれまでに読んできた文集の資料の箇所を提示すると共に、その資料をどのように読んできたのか、どのような問題を発見したのかレジュメを用いて報告を行う。報告後、十数名の参加者全員で討論を行う。私自身も文集を使う場合、断片的な利用となるケースが多いので、資料を通読させ、その中で問題を発見させることを前提に、参加者全員に毎回、報告させ、全体で討議を行うという方式は参考になるものだった。参加する機会はなかったが台北では同じく宋史研究を代表する梁庚堯、柳立言といった研究者が同様な主旨の読書会を定期的に開いているとのこと、若手養成の体制が整っている印象を受けた。

これらとは異なる主旨で毎月「宋史座談会」という研究発表を行う研究会が開かれている。5月末には、会の主催者王徳毅先生の依頼を受け、同会で一度報告させていただいたが、台北を中心として宋史の研究者が集まる

会で、報告した際には黄寬重、柳立言、陶晋生、劉祥光、李天鳴、黄繁光、何冠環（香港）などの著名な学者が参加され、私の報告に対して貴重な意見を提供してくれた。

台湾滞在中に吉報を得た。大阪市立大学にて私のもとで学び、その後、台湾の国立中興大学、中央研究院歴史語言研究所にてそれぞれ博士後研究員（一定の任期を有し、給料をもらい研究に従事する身分）として研究に従事していた山口智哉君が、この8月より国立台北大学歴史学系の助理教授として採用されることとなった。台北大学では宋史の授業の他、日本史の授業を併せて担当することになっており<sup>3)</sup>、日本人が外国で奉職する条件を見事に示してくれた。彼自身の言葉によれば、同時期に台北大学の歴史学系に採用された教員は満洲語、オランダ語の専門家であるとのことであり、専門分野での高い能力と併せて多言語能力を有する教員を求めている状況を見て取ることができる。台湾では近年台湾史が歴史学の中で重要な位置を占めるようになっており、中国史のポストが激減し、就職難の問題が深刻化している。宋史の30～40代の優秀な研究者がポストを得られない状況の中、就職するためには何らかの特別な能力が必要となってきたというところであろう。

次に中央研究院近代史研究所との合同シンポジウム「近代東亞城市的社会群体与社会网络」国際学術研討会について触れておく。詳細については別途報告書が作成される予定なので省略するが、日本から9名の参加者の他、台湾、中国、アメリカ、オーストラリアなどの報告者を含めて20数名の報告が行われた。近代東アジア都市の社会集団とネットワークという表題からわかるように、宋史研究者にとって初めて耳にするような内容が多かったが、葉文心教授（カルフォルニア州立大学バークレー校東亞研究所（Institute of East Asian Studies））の基調報告が印象に残っている。都市社会研究に於いて空間とネットワークの解明が不可欠であるという趣旨の内容であった。丁度、今回報告させてもらったのが「宋代科举社会におけるネットワーク」であり、科举社会における公共空間とネットワークの問題について論じた。葉教授の報告以外にも多くの報告者が都市社会における空間とネットワークの問題を論じ、中国社会の独特のネットワークのあり方に言及していた。日本の宋史研究ではこうした視点による研究が立ち後れており、近現代の中国社会史の方法論を視野に入れ、分析を進めていく重要性を改めて痛感した<sup>4)</sup>。

次に8月に開封市（河南省）で開かれた宋史年会の様子を簡単に紹介する。二年に一度開催される宋史年会にはこのところ連続三度目の参加となった。今回の会議には230余名の参加者が中国内外より集い、複数のパネルに分かれて報告を行った。2008年の雲南大学（雲南省昆明市）の宋史年会よりパネル方式が採用されている

が、会議は次のような方式で行われる。前年度にパネルの立候補が受け付けられる。私は中山大学の曹家斉教授と「政治空間変化与両宋政治運行」のパネルを組むこととし、大会事務局に申請をした。当初予定していたのは、日本人数名、台湾人1名、大陸から数名という形で10名あまりのパネルであったが、パネルが公表されると私と曹家斉教授のもとに参加希望のメールが送られてきたため、調整の結果、日本人4名（藤本猛、宮崎聖明、廣瀬憲雄各氏と私）、台湾人3名（劉静貞、李天鳴、黄繁光各氏）、香港人1名（何冠環氏）、中国人8名（曹家斉、虞雲国、王化雨、余蔚、楊小敏、胡文寧、張明華、鄒賀各氏）、この他黄寬重、虞雲国両氏に総括評議をお願いした。大会前に原稿の提出が義務づけられると共に、パネル内での相互評議を事前に行うことになっており、こちらの評議の原稿も大会前に提出が行われた。1パネル（4名標準）には100分の時間が与えられ、報告、総括評議、自由討論の形で議論が進行していく。我々は1パネルであったが、人数が16名のため、4パネル相当の時間が与えられた。近年の中国、台湾などの外国の傾向として報告より討論に重点が置かれるようになっている。報告は既にペーパーとなっており、またパネル内では相互に事前閲覧が行われており、内容を熟知していることを前提に、我々のパネルでは報告時間は10分、総括評議20分、自由討論40分という形で、主持人（何冠環、黄繁光、曹家斉各氏と筆者が1パネルごと担当）の運営のもと進められた。従って報告者は10分及び最後の自由討論の時間を利用して、自己の報告ならびに質疑・意見に対する返答をしなければならない。今回我々のパネル参加者の日本人研究者は初めて国際学会に参加された方もおり、質疑応答に苦勞していた。それぞれの中国語の能力は相当のレベルに達しているのだから、これは学会に慣れることによって解消されていく問題であると思われる。

最後に、もう一つ宋史年会開催中に開かれた鄧広銘学術奨励基金の審査会議を紹介しておきたい。これは中国の高名な宋史研究者鄧広銘氏が中国の宋史研究会に委ねられた基金をもとに、若手の宋史研究者（50才以下の宋遼金史領域の研究者、海外の研究者も該当する）の著書、論文の学術成果に対して審査を行うものである。今回の開催が7回目、従来は二年に一度審査が行われていたが、今回からは四年に一度の審査となった。その結果、該当の研究成果は2008年1月～2012年1月の間に公表されたものが対象となった。

おおよその内容は以下の通りである。

- (1) 審査を希望する申請者は期間内に中国宋史研究会秘書処に、申請書に記入するとともに審査対象の結果を送付する。
- (2) 評審委員会は申請者の篩い落としをした上、評審委員内で審査を行い、一等奨（研究難度が高く、学

## 第六屆全國宋史博士生暑期講習班日程表

活動内容與 主講人	段 時	上午 8:30-11:30	下午 14:30-17:30	晚上 19:30-21:30
期 日				
2012年8月13日		學員與講座學者報到		
8月14日		專題講座(導讀式): 題目:從族譜中閱讀歷史(上) 主講人:劉志偉	專題講座(導讀式): 題目:從族譜中閱讀歷史(下) 主講人:劉志偉	專題討論 出席學者:劉志偉·溫春來·吳雅婷 曹家齊等 主持人:辜夢子·鄭慶賓·陳漢傑
8月15日		專題講座: 題目:唐宋城市研究學術史批判 主講人:包偉民	專題講座: 題目:契丹人殉制研究——兼論遼金 元“燒飯”之俗 主講人:劉浦江	專題討論 出席學者:包偉民·劉浦江·胡勁茵 等 主持人:聶文華·玄花·程佩
8月16日		專題講座: 題目:移步換景:性別史鏡頭下的宋 史新視野 Shifting Perspectives: How looking through a gendered lens changes our view of Song History 主講人:柏文莉	專題講座(導讀式): 題目:從資料分析到文 本解讀:宋代性別史研究的檢討 主講人:劉靜貞	專題討論 出席學者:柏文莉·劉靜貞·易素梅 等 主持人:張維玲·李旭·劉本棟
8月17日		專題講座: 題目:從“試錯”中尋求方向——我 們今天如何寫論文 主講人:鄧小南	綜合討論 出席學者:鄧小南·柏文莉·劉靜貞 劉浦江等 主持人:李春圓·王剛·謝婧	聚餐 時間:18:00 地點:中大紫荊園餐廳
8月18日		學員與學者離穗		

術上大きな成果があり、国内外の学界で高い評価を得ている、奨励金5000元)、二等奨(研究難度がかなり高く、学術上大きな成果があり、国内外の学界で広範な評価を得ている、奨励金3000元)、三等奨(一定の研究難度を有し、学術上の新たな知見があり、国内外の学界で良い反響がある、奨励金2000元)を選考する。該当事がない場合は該当無しとする。

当日、審査を担当したのは鄧小南(現中国宋史研究会会長、北京大学教授)、朱瑞熙(前中国宋史研究会会長、上海師範大学教授)、黄寬重(台湾長庚大学教授)、李華瑞(首都師範大学教授)、劉復生(四川大学教授)、程民生(河南大学教授)、劉靜貞(台湾国立成功大学教授)の各氏と筆者であり<sup>5)</sup>、その他、欠席のため王曾瑜(前中国宋史研究会会長、中国社会科学院歴史研究所研究員)、龔延明(浙江大学教授)の両氏が書面審査結果を提出した。書籍6件、論文1件を三時間余にわたって審査し、無記名投票の結果、以下のものが選ばれ、宋史年会大会の場で報告された。

一等奨:該当事無し

二等奨:譚景玉『宋代鄉村組織研究』山東人民出版社、2010年4月  
趙冬梅『文武之間:北宋武選官研究』北京大学出版社、2010年3月

三等奨:鉄愛花『宋代士人階層女性研究』人民出版社、2011年4月  
魏峰『宋代遷徙官僚家族研究』上海古籍出版社、2009年12月

各研究の評価についてはそれぞれの委員間で違いもあるので、ここでは省略する。ただ、興味深いのは、こうした宋史研究の領域に於いて、若手の研究成果に対して国際的な審査を行う取り組みを実施していることである。日本の宋史研究者の研究成果がこの審査の場に参加したならばどうであっただろうか。50才未満という条件で審査対象となりうる研究成果が存在していないわけではないが、対象は中国語で書かれたものであり、同じ土俵になかなか登れないという印象も抱く。ただ、我々が考えなければならないのは、こうした国際的な審査をくぐり抜け、高い学術性の能力を有した研究者が育っていつていることである。

この他、宋史年会の直前に中山大学に於いて、このところ毎年恒例となっている「宋史講習班」が実施された。50名ほどの中国から参加した博士課程の学生に対して、鄧小南、劉浦江(以上北京大学教授)、包偉民(人民大学教授)、劉志偉(中山大学教授)、劉靜貞(台湾国立成功大学教授)、B.Bossler(カルフォルニア州立デービス校教授)の各氏が講義を行い、参加者と討論を行った。筆者はこの「宋史講習班」に参加していない<sup>6)</sup>が、



中山大学の胡勁茵氏より送付いただいたデータをそのままの形で添付しておく。

日程表を見ればわかるように、4日間にわたって朝から夕方までみっちり講義が行われ、晩には参加者と講師との間で討論が行われる形となっている。胡勁茵氏からの説明では、今回は宋史以外の研究者（劉志偉氏は明清史、劉浦江氏は遼金史の専門家）に方法論を講じてもらった他、研究方法や論文作成について丁寧な指導がなされたという。中でも劉靜貞、B.Bossler（中文名柏文莉）両氏のジェンダー史の講義は異彩を放っていたとのことであった。現在、世界的に見ても宋代のジェンダー史の代表的な研究者である両氏の講義、並びに討論の機会を得た参加者にとっては大きな裨益があったことと思われる。

以上、幾つかの活動を断片的に紹介してきた。欧米の研究状況については不案内で紹介できないが、現在、中国、台湾では若手研究者養成の国際的な取り組みが進められている。こうした一連の取り組みの中で、海外では数多くの優秀な宋史研究者が養成されており、日本国内では同様な取り組みを行えない以上、日本の若手研究者がこうした国際的な取り組みの中へ積極的に参加していく姿勢が求められるように思われる。

## 注

1. 「日本の宋代史研究の現状と課題 — 2011年秋中国上海滞在の体験を手がかりとして —」参照。
2. 政治大学の前身は1927年に南京で設立された中国国民党中央党務学校（当時の中国の上級公務員養成の唯一の学校）であり、1929年に中央政治学校として改編、1946年、中央政治学校と中央幹部学校が合併し、国立政治大学となった。1949年国共内戦を経て中華人民共和国が成立するとともに事実上閉校となり、国民党が台湾に逃れた後の1955年に台湾において再興された。蒋介石が終生名誉学長となっており、構内に蒋介石の銅像が建てられている。
3. 台湾の日本史の専門教員は非常に少ない。滞在した政治大学では日本から来ている一名の教員が「助理教授級約聘教學人員」（契約期間にもとづく教員）と言う形で文理学院歴史学系ではなく外国語学院日本語文学系に在籍していた。
4. 筆者も編集に加わった論文集として『宋代社会のネットワーク』（汲古書院、1998年）がある。この論文集の中で、多様なネットワークにもとづく柔構造社会としての宋代社会の姿を描き出そうと試みた。残念ながら、日本ではその後、こうした方向を発展した宋史の研究は殆ど出されていない。
5. 前回の武漢の宋史年会の折に、評審委員就任の依頼を受け、受諾したため、今回初めて審査会への参加であった。
6. 前年度上海師範大学で行われた「宋史講習班」では講師の仕事を担当させていただいた。その時の様子は注1所掲の文章の中で書いているので併せて参照されたい。